

第24回いたばし国際絵本翻訳大賞イタリア語部門 『SOGNI D'ORO POMODORO』講評

どうしても食べられないものがひとつやふたつ、誰にだってありますよね。苦手なトマトと一緒に部屋に閉じ込められたアニータは、トマトを赤ちゃんにみたてて、話しかけます。すると……。日常の光景から、思いがけなく苦手を克服できるまでを描いた今回のテキスト、“*Sogni d'oro pomodoro*”は、なにより、その発想とシンプルな挿絵&文章が魅力なので、それをうまく活かせる文章に訳していくことが大切です。原文があまりシンプルだと、作品世界にのめり込んで訳しているうちに、つい強調したくなるものですが、原文にない文章を付け加えてしまうのは考えものです。ふと気づくと訳文の長さが原文の3倍ぐらいにふくれあがったり、おなじページに「ぜったい」や「すっかり」といった強調の言葉が3回も4回も使われているということになりかねません。とくに絵本の場合はスペースが限られていますから、原文の文章とほぼおなじ長さの訳文に仕上げることを心掛けるようにしてください。そうすることによって、余計な言葉は必然的にそぎ落とされ、より洗練された、シャープな訳文に仕上がるはずですよ。

たとえば、27 ページ、 **Lo mastico. E' succoso. Lo ingoio. Era buono.** という短文が続いています。最優秀賞の方は、「かんでみる。なんてジューシー。のみこんだ。おいしいじゃない」と訳してくれました。原文との長さもほぼ同じですし、日本語訳の文字数もそろっていて、リズムカルな訳になっています。訳文だけ読むと、主語も目的語も書かれていないので、なんだかとっても物足りないような気がしますが、そこは絵が補ってくれますから、説明したくなる気持ちをぐっと抑えることが大切です。この **ingoiare** という動詞は、「飲みこむ」という意味です。**assaggiare**(味をみる) ⇒ **mordere**(かじる) ⇒ **masticare**(噛む) ときて、ふと気づいたら飲みこんでいて、手の中にあっただはずのトマトがなくなっていた。それが次の文章の、**Ce l'ho fatta, l'ho mangiato!** という達成感につながっています。「やった！ わたし トマトをたべられたよ！」 シンプルな文章ですが、臨場感や喜びがじゅうぶん伝わってきますね。

原文は、2 ページ目の怒ったママの台詞をのぞいて、ぜんぶアニータが心のなかで考えていることです。地の文章とアニータのセリフとに分けて訳してくれた方も見受けられましたが、独り語りの原文を尊重したほうがいいでしょう。また、冒頭の怒ったママの台詞 **"basta con i capricci!"** は、11 ページにアニータがトマトに言っている台詞と同じです。お母さんの口癖や、怒るときの口調などは、子どもがそのまま真

似していることが日常でもよくありますよね。こういう場合は訳文もそろえてあげないと、そのほほえまさが伝わりませんので注意してください。

タイトルの **Sogni d'oro pomodoro** は、**-oro** と **-oro** で韻を踏んでいます。なかなかそこまで訳文に反映するのは難しいと思います。「いいゆめみてね、トマトちゃん」、「ぐっすりおやすみ、トマトちゃん」と、意味だけを訳したものがほとんどでした。

小さな子どもの目線から物語が語られているので、いわゆる「赤ちゃん言葉」や、擬音語、擬態語を多く使っている訳が目立ちました。ところどころ効果的に使われている分にはいいですが、あまり使いすぎると逆効果になってしまうのでほどほどに。同様に、カタカナもあまり多用すると読みにくくなってしまいます。文章も絵と一体になって視覚的に捉えられるものですから、文字をならべてみてきれいかどうか、つねにバランスに気を配るようにしましょう。

トマトを赤ちゃんとして擬人化している描写がおもしろいのですから、たとえばトマトの **capelli** とか **sedere** とか **lacrima** とか、ふつうに考えたらありえないものでも、「へた」とか「下のほう」とか「汁」などと常識的に訳す必要はなく、比喻を大切に、パジャマを着たトマトくんが頭のなかで動き出すような訳文にしてください。

以下に、そのほか間違いが目立った箇所をいくつかあげておきます。

・ 3 ページ目 **capiranno di cosa sono capace! : essere capace di...** で、「……をする能力がある」という意味。直訳すると、「(ママとパパは)私にどんな力があるかわかるだろう」といった意味になります。「わたしがほんきだったってわかるわよ」、「わたしは そうと決めたらやりぬくってこと！」などが、原文の意味がよく伝えられている訳として挙げられます。

・ 6 ページ目 **non lo mangio mica,** : この **mica** は、「食べるわけじゃないの」といったようなニュアンスです。

・ 7 ページ目 **come darti torto...** : 「あなたが間違っていると、どうしたら言えるだろうか」で、「あなたは正しい」という意味です。「むりもないわ」、「そりゃそうだよ」 というくらいの訳でいいでしょう。

・ 10 ページ目 **gli faccio cucù** : **cucù** は 「いないいないばあ」 のことです。 **gli**= 「トマトに」

・ 14 ページ目 **La nonna(.....)è di là** : 「おばあちゃんは向こう (の部屋) にいる」。「天国にいる」と勘違いされた方がいましたが、天国は **l'al di là** です。

・15 ページ目 **casetta**: **casa** (家) に、小さいという意味の接尾辞 **-etta** がついた形ですね。**casetta** (箱) と勘違いされていた方がけっこういました。s の数に注意してください。

・19 ページ目 **Fa' miao-miao come un gattin, fa' sentire l'odorin che puzzin**: このフィラストロッカ (わらべ歌) は、なかなか訳しにくかったですね。最初の **fa'** は命令形です。**gattin** は、**gatto** に縮小の接尾辞がついた **gattino** から、最後の **o** の音が落ちたもの。**puzzin** も、**puzzo** がおなじように変形しています。ですので、訳としては、「こねこのようにミャーミャーないてごらん、(指の) においをかがせてごらん、なんてくさいの」という意味です。これを少しリズムカルにして、全体を歌らしく味付けすると、たとえば、「あんよの あかちゃんゆび ちっちゃい ゆび／にゃーにゃー ないてごらん こねこみたいに／においは どうかな／くさい、くさい……」(優秀賞) という感じになります。

・30 ページ目 **non l'ho fatto apposta**: 「そうしようと思ってしたわけじゃない」という意味です。「わざとしたんじゃないの」という訳ですと、悪いことをしたときの言い訳のようになってしまうので、「そんなつもりはなかったんだけど」とか、「たまたま なんだけど」といった訳がいいでしょう。

今回はテキストが平易だったので、誤訳は非常に少なかったです。その分、ちょっとした言葉の選び方で差が出てしまったように思います。言葉の使い方というのは、どうしてもそれぞれ癖というものがありますので(うまく活かせば、それが個性にもつながります)、いったん訳文が仕上がったら、身近な人に読んでもらうか、あるいは音読して誰かに聞いてもらって、助言してもらうことをお勧めします。独りで訳していたときには気づかなかった視点から、なにかが見えてくるかもしれません。大勢の人が声に出して読みたいと思うような訳文を目指してください。

[文中のページ数は、タイトルページの次を1ページ目としてカウントしたものです]

イタリア語部門審査員 関口 英子